



2024. 3. 31

令和5年度 外部支援・講師派遣等
障害理解授業

附属小3年生の総合的な学習(障害理解)への協力

視覚障害・肢体不自由

筑波大学東京キャンパス近辺では、白杖を使って点字ブロック上を歩行している方々や車いすを利用されている方がよくいらっしゃいます。児童は何気なく目にしていますが、その人たちのことをあまりよく知りません。そこで筑波大学附属小学校(以下、附属小)3年生(29名)は、「障害理解」を取り入れた総合的な学習の時間「いろとりどりの人たちと共に生きよう」を計画し、特別支援教育連携推進グループ(以下、当グループ)が特別支援学校との連絡調整、学習内容のアドバイス、講師を担い、特別授業及び附属特別支援学校(視覚障害、肢体不自由)との交流活動を実施しました。

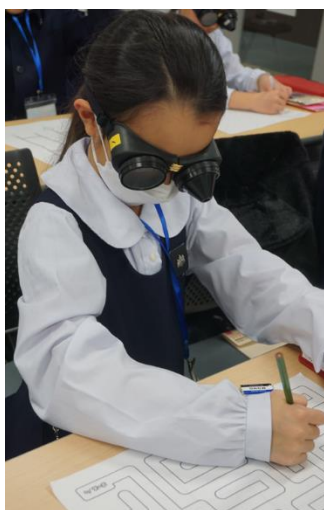
【視覚障害】

① 2/21(水) 東京キャンパス文京校舎にて「見えない・見えにくいってどういうこと?」と題した授業を、附属視覚特別支援学校(以下、附属視覚)から派遣されている当グループ員が中心となって行いました。シミュレーションゴーグルを使用した見えにくさの体験、白杖歩行やガイド(手引き)歩行の体験を行いました。また、点字教科書や拡大教科書など、実際に使用されている教材・教具に触れる機会も設けました。



～附属小児童の感想より～

「目の見えない人がどのように動いているのか、どういう物を使っているのか分かったし、少しだけ目の見えない人に向き合えたんじゃないのかなと思った。」



弱視体験 めいろに挑戦



ガイド(手引き)歩行体験



白杖歩行体験

② 3/1(金) 視覚障害当事者の方からお話を聞く授業を、筑波大学理療科教員養成施設(※)の工藤 滋先生に担当していただきました。前回学習した成果を生かして、附属小児童が全盲の工藤先生をガイド(手引き)歩行して案内しました。

児童たちは、目が見えない人たちが普段どのように生活しているか大変興味・関心を持っており、工藤先生が子どもたちに分かりやすく丁寧にお話ししてくださいました。

(※) 附属小に隣接する筑波大学東京キャンパス文京校舎内にある、はり、きゅう、あん摩・マッサージ・指圧の教員を養成する施設。

～附属小児童の感想より～

「工藤先生からの、『目が見えないだけで僕とみんなは同じだよ』という言葉が印象的でした。優しくて楽しくまなべました。」



ガイド(手引き)歩行する様子

③ 3/18(月) 附属小児童が附属視覚を訪問し、劇を通じた交流活動を行いました。劇はレオ・レオニの絵本『じぶんだけのいろ』を題材とした内容で、さまざまな動物がそれぞれに色を持っているというお話です。これまでの特別授業を通して、目の不自由な人たちに伝えるにはどんな工夫をしたらよいか皆で意見を出し合い、セリフを変更したり、鳥が羽ばたく様子を音で表現したりする等の準備をして本番に臨みました。また、劇終了後には、それぞれの役がどのような姿なのかが分かるよう、実際に衣装や被り物に触れながら交流しました。附属視覚の児童には、劇の取り組みがとても新鮮だったようで、「ぼくたちも劇をやってみたい」という声が聞かれました。

～附属小児童の感想より～

「最初は、きんちょうしたけれど、桐が丘の時(※)のように話すと、しゅみが合って楽しかった。げきは、目が見えない子や目が見えにくい子が真剣に聞いてくれた。色などを想ぞうしにくい子のために、伝わりやすいセリフに変えたり、近くで声かけをしたりしたこともよかったと思う。」

(※) 3/12 に附属桐が丘(肢体不自由)との交流を実施済み。詳しくは次ページを参照。



劇を披露する附属小の児童と鑑賞する附属視覚の児童

【肢体不自由】

④ 3/12(火) 附属小の児童たちが附属桐が丘特別支援学校(以下、附属桐が丘)を訪問し、劇を通じた交流活動を行いました。事前に、附属桐が丘から派遣されている当グループ員が附属小3年生の学級を訪問し、附属桐が丘の紹介や動きにくさについて説明をしました。附属小の児童からは、「教室には、どのような工夫があるのですか。」等、とても多くの質問が出されて、附属桐が丘のことを積極的に知りたいという姿がみられました。

当日の交流では、附属桐が丘の児童にどのようにしたら劇を分かりやすく伝えられるかを考え、立ち位置などを工夫し、附属桐が丘の児童と一緒に楽しめるように紹介しました。

また、事前に互いの学校で「自己紹介の動画」を交換しあっていたため、劇の後の自己紹介タイムでは、附属小の児童が附属桐が丘の児童に「〇〇ちゃん。」とすぐに名前を呼んで話しかけたり、附属桐が丘の児童が劇の小道具を貸してもらって一緒に写真を撮ったりするなど、交流時間の終了ぎりぎりまで、話がはずんでいました。

交流後も、附属桐が丘の児童は仲良くなった附属小の児童の話をするなど、交流の楽しい余韻に浸っていました。双方の学校の児童が生き生きとした表情を見せていた様子から、充実した良い交流であったことがうかがえました。

～附属小児童の感想より～

「げきの後に交流した時、ゲームが好きな〇〇ちゃんと3年生といっしょにマイクラの話をしてもらいがった。わたしたちが伝えたいことを分かってくれてうれしかった。」



附属小の児童が附属桐が丘の児童の周りを囲み、一緒になって劇を創り上げるように、構成をアレンジして劇を披露しました。

総合的な学習の取組を通して

～附属小教員のコメント

子どもたちは学習を通して、これまであまり気にかけていなかった、白杖をもっている人、ヘルプマークをもっている人など、近くで生活していることに気付いていきました。

点字ブロックにQRコードがついている、点字ブロックを歩行してきた白杖の人がすれ違うことができずに困っていた様子など、教室で報告がされました。特に工藤先生との交流、学校間の交流を通して、障害のある人や友達に対しての心のバリアがなくなっていきました。こうした経験を活かして、相手を大事にしたり、自分のできることを探して行動したりと、社会の中で積極的に関わっていってくれると嬉しいなと感じます。

～附属小教員のコメント～

(附属桐が丘との交流では)劇の後、たった5分間の時間でしたが、事前に交換した紹介ビデオで知った得意なこと、好きなことをきっかけにたくさん話をしていました。この学習が始まったころは、「障害」があるからどう助けたらよいか、どんな設備の工夫があったらよいかという視点が多かったです。でも、学習が進むにつれて、相手の気持ちを真剣に考えること、そのために、体験して自分が感じること、実際に本人や先生たちにきいてみることなど、自分と相手の関係性で考えるようになってきたように思います。

障害理解・啓発を目的とした授業・講義の
ご相談・ご依頼等の問い合わせ先

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ
Mail: snerc@gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp
Tel: 03-3942-6923